

# 淀川城北ワンドにおける外来魚駆除状況（2023年の報告）

○北川 瑞希<sup>1</sup>・市川 昂宗<sup>1</sup>・阿部 晟大<sup>1</sup>・三橋 雅子<sup>1</sup>・田中 耕司<sup>1</sup>・  
毛利 甚太郎<sup>2</sup>・鶴田 哲也<sup>3</sup>・山本 義彦<sup>4</sup>・丸山 勇氣<sup>4</sup>・河合 典彦<sup>5</sup>・  
綾 史郎<sup>5</sup>・高田 昌彦<sup>6</sup>

(1 大阪工業大学 2 中林建設株式会社 3 大阪産業大学 4 大阪府立環境農林水産総合研究所  
5 淀川水系イタセンパラ研究会 6 琵琶湖を戻す会)

## 1. はじめに

発表者らが参加している『淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク』では、2012年より大阪府のイタセンパラをはじめとした在来魚の保全活動を行なっている。具体的には、淀川下流域に存在する城北ワンド群の34, 35号ワンドにおいて、地引網を使った外来魚の定期的な駆除活動を継続して行ない、原則、4月から11月に月2回、1回につき3, 4回地引網を引き、外来魚は駆除し、在来魚はリリースしている。捕獲した魚類は魚種ごとに分け、個体数と体長計測を行なっている。

2020, 2021年は新型コロナによる行動制限により、活動を見合わせる事が多かったが、2022年には計15回実施し、2023年は同時期に計22回実施することができた。本発表ではこれまでの活動結果から得られた情報と2023年の活動状況について報告する。

## 2. 外来魚駆除の効果

2012年の活動開始時には捕獲された魚類の7割以上がオオクチバスとブルーギルによって占められていたが、年度によって変動はあるものの、外来魚率が3～4割に抑えられるようになった。

不定期に行なっている近隣のワンドでの調査で採集された魚種と個体数のデータから、定期的・継続的に外来魚駆除活動を実施している34, 35号ワンドでは、外来魚率が低いと同時に採集される魚種の種多様性が高いことが多様性指数から示された。在来魚の保全のために今後も継続して外来魚駆除活動を続け、外来魚の増加を抑制する必要がある。

## 3. 2023年の状況

2023年の捕獲結果から34, 35号ワンドでは外来魚率を3割程度に抑制することができていた。外来魚の魚種ではブルーギルが最も多く、続いてオオクチバス、タイリクバラタナゴとなっているが、タイリクバラタナゴの個体数はここ3年ほど減少している。在来のタナゴ類や底生魚類の捕獲数も減少傾向にあり、水温や底質など、なんらかの要因が予想されるが、明らかではない。

2023年はじめに35号ワンドの北側に新しく浅いワンドが整備され、34, 35号ワンドの定期的な地引網に加え、新しい北側のワンド（以下、北ワンドと呼ぶ）でも地引網を引いた。北ワンドでは春の時点では捕獲される魚種・個体数ともに少なかったが、時間の経過とともに魚種・個体数が増えたほか、34, 35号ワンドではあまり捕獲されていないヨドゼゼラが北ワンドで多く捕獲されることもあった。